

「土崎空襲の話聞いて」

土崎小学校 6年1組 渡 部 はるひ

私が通う土崎小学校には、楽しそうな子どもたちが描かれた石碑があります。それは、土崎空襲で亡くなった十二人の子どもの受難の碑です。この受難の碑を見た時、そこに大きく書かれていた「祈る永遠の平和」という言葉が私の心に響きました。「なぜ、この言葉を大きく書いたのだろう、この言葉にはどんな思いがこめられているのだろう。」

一九四五年八月十四日の夜、土崎空襲が始まりました。鳴り響く爆弾の音、真っ赤な空、私は空襲を体験した方の話を聞いているうちにこわくなってきました。一万二千発をこえる爆弾が空から降ってくるなんて想像もできません。米軍が土崎を襲った理由は石油です。製油所をこわすためだけに二百五十人以上の死者がでたのです。私と同じ小学校六年生の男の子も亡くなったそうです。その男の子は防空ごうにかくれていたのですが、ちょっとしたことで防空ごうから出た時に、爆弾の破片が右側のわき腹にささってしまったのです。今の土崎南小学校に運ばれたのですが、残念ながら亡くなってしまったそうです。土崎空襲がなければ、楽しく暮らしながら成長したはずなのに、と考えると胸が痛くなってきました。空襲を体験した方の話を聞きながら、「祈る永遠の平和」という言葉を思い出しました。この言葉には、きっと「もうこんな戦争は起こらないでほしい。子どもたちには、ずっと幸せに暮らしてほしい」という強い願いがこめられているのではないかと思いました。

戦争があった時代と比べると、今は食べるものや着るものなどがすぐに手に入り、とても幸せに暮らせています。私は、この当たり前に暮らせることが、平和なことだったのだと土崎空襲の話聞いて気づくことができました。八十年前の土崎には、どんなことが起こったのか、空襲について学んだことを忘れずにこれからも生活していきたいと思います。